

Title	P. Harding; Androtion and the Atthis
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.64, No.2 (1995. 3) ,p.131(247)- 135(251)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19950300-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

P. Harding;

Androtion and the Atthis

Pp. XI+236. Oxford University Press,

Oxford 1994. £ 27.50.

ISBN 0 19 872148 X

真下 英信

「アテナイの地方史」(アッティス)を本格的に勉強しようと考えている学部学生に対して、恰好の入門書を紹介したい。

本書の表題にあるアンドロティオン(以下、A.と省略)は、アッティス作家を代表する人物である。アッティスとは、ひたすら国家の諸制度の史的発展を中心に記述されているアリストテレスの『アテナイ人の国制』(以下、AP.と省略)や『政治学』などとは対照的に、

国制史の他に神話、宗教、地誌、そして祭典や神殿の縁起譚等を含めて年代記風に綴られたアテナイの地方史の呼称である。

かかる形態の史書の執筆は、前五世紀末のレスボスの人ヘラニコスをもって嚆矢とする。以後、前四世紀のアテナイのクレイデモス、本書の主題のA.そして前三世紀のフィロコロスを代表として七人の名が今日伝えられている。しかし、残念ながら彼等の著書は、僅かな断片を除いて全て煙滅した。

そもそもアッティスの断片は、僅少故にさほど人々の耳目をひかなかった。だが、十九世紀末にエジプトの砂漠からAP.の大部のパピルスが発見されると、これらの断片はにわかに古典学者の注目の的となった。その研究成果は、直ちにU. von Wilamowitz-Moellendorf, *Aristoteles und Athen* (Berlin 1893. 特に vol. I Pp. 260-290) や G. Busolt, *Griechische Staatskunde* vol. I (München 1920. 特に Pp. 82-97) などの書となって現れた。両書は、アッティス研究の初期の成果として今日でも重要である。

こうした初期の研究、特に Wilamowitz-Moellendorf のそれを踏まえながらも彼の研究を批判的に摂取し、

アッティス研究史上画期的な業績、いわば金字塔を打ちたてたのが、F. Jacobyであった。

彼は、浩瀚な『ギリシア史家断片集成』(FGH)の編纂途上で *Atthis. The local chronicles of ancient Athens* (Oxford 1949) を世に問うたのである。以後、今日に至るまで、この二書に展開されているアッティスならびにアッティス作家像は、ほぼ定説となっている。

彼以前にも、A.P.の資料としてクレイデモスやA.が注目されていたが、我々が問題にするA.を中心に Jacoby説を要約すると次の三点となろう。

- (1) 前四世紀中頃よりアテナイの政争は、民会での演説や政治的な小冊子の刊行をもって行われただけではない、アテナイの国家や国制の発達史をどう見るかという問題とも絡んでいた (*Atthis* p. 76)。
- (2) この政争は、アッティス作者の間にも反映している。クレイデモスが民主派であったのに対して、A.は保守的な人物であった。彼等は、各々自己の党派、主義主張の擁護を目的にアテナイの地方史を執筆した(クレイデモスについては *Atthis* P. 71-78, A.については *FGH* III b suppl. 1 P. 96-97)。
- (3) アリストテレスは、A.P.を著述するにあたりA.の

著作を重視した。ここで彼は、A.の政治的偏向を一部訂正したが (*FGH* III b suppl. 1 p. 145)、利用した資料の偏りは、A.P.にも反映することになった (*Atthis* P. 213)。

しかるに、一九七〇年代になると、本書の著者 Harding は、このアッティス研究の泰斗 Jacoby を徹頭徹尾批判する論考を次々に発表していったのである(これらの論題、所収雑誌名等については、本書の巻末の参考文献リストを参照されたい)。

ここに紹介する本書は、これら一連の考察を基礎に、歴史家でもあり政治家としても活躍したA.の履歴を中心にアッティス作家達をまず概説し、次にA.の断片を翻訳、詳細な注釈を付したものである。それ故、本書は、アッティス研究史上問題の書と考えられるので本欄に取り上げた次第である。その主張の骨子は、以下の通りである。

- (1) A.P.の資料は何か、という視点からなされて来た従来のアッティス研究の姿勢は正しくない。両者は、切り離して考察されるべき問題である。例えば、A.にはA.なりのアッティス執筆の視点があつたはずである。

(2) クレイデモスにも A. にも Jacoby の主張する政治的偏向は認められない。A. は、永年市民の為に活躍した人物であつて、イデオロギーに基づいて行動したというよりも、いわば人望故に成功した現実主義的な政治家であつた。

(3) A. の保守的性格によつて、A.P. に認められる保守的な傾向を説明するのは誤りである。たしかに、A. の著作は、A.P. の資料になつた所もあるが、A.P. に認められる保守性は、資料に起因するものではなく、アリストテレス自身の哲学と時代に求められるべきである。

本書は、内容的に次の三部に分けられる。

第一部は、序論である。序論といつても五十二頁に及ぶもので、まずアッティスなる名の意味と歴史、記述形態、文体の特徴とその限界が論じられる。次に、ヘラニコスを初めとして伝えられる七人のアッティス作家について、その履歴、作品とその内容等が考察される。当然ながら、A. を中心に記述されている。最後に、アッティスの史料としての影響、文書や碑文の利用程度、作者の政治思想、そして後世の人々のアッティス利用、特に A. と A.P. の関係が論じられる。第一部では、徹底し

た反 Jacoby の態度が貫かれており、ほぼ数頁ごとに彼を批判する一句が出てくる程である。

第二部は、A. に関する「証言」(Testimonia) ならびに断片の翻訳である。前者は僅か六頁、後者も六十八断片を収めた九頁しかない。残存する断片がいかに僅少か、人は想像出来よう。

第三部は、断片への注釈で、本書の中核をなす。第二部と併せると全体の四分の三近くになる。今、これらの詳細な注釈を逐一論じるとまはない。ここでは、上述の Jacoby の見解の(2)、(3)への Harding の反論を二三記して、評者の寸評を付加するに止めておきたい。

(2) について

注 6 (オストラキスモの起源) : A.P. XXII. 3 の記述と異なり、ハルポクラティオンによると、A. は陶片追放の制定を四八八／七年としている。この事実を根拠に Jacoby は、次の様に推論する。A. は、クレイステネスが民主的制度である陶片追放の制定者であつた事実を否定することによつて、彼の改革がより温和なものであつたと主張しようとした。ここに A. の保守的な性格が明示されている (FGH III b suppl I p. 119-124)。

だが、この解釈に Harding は反駁する。この点、Dov-

er (1963), Summer (1964) の研究以来、本断片のハルポクラティオンの一文は、A. の文を誤解したものとする見解が通説となっており、Jacoby 論は成立せず、Harding の見解が正しい。

fr. 34 (ソロンのセイサクティア) : A はソロンの改革の過激さを否定するために、セイサクティアを利子軽減、貨幣改革に解釈したと Jacoby は考える (FGH III b suppl. 1 p. 144-145)。これに対して、Harding は、A. のセイサクティア解釈は誤っているだけではない、前四世紀の A. の時代には負債の帳消しや土地の再分配を要求するような革命的動向はアテナイに存在しなかったとして Jacoby 説を退ける。

たしかに、Jacoby のセイサクティアの解釈は間違っている。しかし、前四世紀、革命的な動きがアテナイになかったとする Harding の主張が正しいとしても、それは Jacoby の見解全体を否定するものにはならないのではなからうか。この点、評者は、Jacoby 説の大枠を認める Rhodes の見解 (AP. への注、p. 127) に賛同したい。なお、fr. 42, 43, 52 の注も参照せよ。

fr. 3, 4 (アレオスパゴスの権能、構成) : アレオスパゴスの権能について、AP. と A. の記述は異なるが、

Jacoby は、AP. が A. を資料にしていると主張する (FGH III b suppl. 1 p. 103-104, 113, 同 suppl. 2 p. 91 n. 86)。だが、Harding は、両者の記述は根本的に異なる故に、AP. が A. を資料としたとは考えられないとみる。

fr. 34; AP. VI. 1, X は、A. を資料にしたと一般にいわれている。この通説に対しても、Harding は反論している。ここに詳細を述べる余裕はないが、評者は、通説に従う Jacoby、Rhodes 説に問題はないと考える。

この他、Harding は、正面切って Jacoby 説に反対するのではなく、ヒュペルボロスの性格 (fr. 42, p. 161) や A. の亡命理由 (fr. 53, p. 180) の如く、いずれの見解が正しいのか決定出来ないとして Jacoby 説を批判する論法も所々で用いている。

この他の点からも、A. は従来考えられている程には AP. の資料になっていないとするのが Harding の見解である。因に、AP. はアリストテレスの著作とする Harding に評者も賛同したい。

以上の Harding の新説に対して、評者の見解を最後に一言しておきたい。

上述の如く、彼の Jacoby 批判には認めるべき点もあ

る。だが、Hardingの反Jacobyn論が全て完璧というわけではなく、いくつかの疑問も残る。彼の反論にもかかわらず、Jacobynの打ち立てた全体像は未だ崩壊していない、というのが本書を一読した評者の印象である。

なお、碩学の解釈に反対し、識者の全面的賛同をかならずしも得ていないと思われる著書を上梓するClarendon Pressの態度には、我が国の出版界も学ぶべきものがあるのではなからうか。

(誤植: p. 184下より二行目、runの前でカッコトジ)

(1994. V. 29)